

文京ふるさと歴史館

BUNKYO MUSEUM NEWS

# だより



**第13号／平成18年4月1日発行**

水戸徳川家 江戸屋敷の跡を訪ねて  
歴史文化資料としての『南総里見八犬伝』  
平成17年度のおゆみ  
ミュージアムショップから  
資料をご寄贈くださった方々  
平成18年度の催し



## 水戸徳川家 江戸屋敷の跡を訪ねて

### 水戸徳川家と江戸屋敷の生活

「頭が高い、控えおろう！このお方を何と心得る。恐れ多くも先の副将軍、水戸光圀公にあらせられるぞ！」はっと息を呑む悪代官。地にひれ伏す、不埒な商人たち。「水戸黄門漫遊記（譚）」を知らない日本人はいない。そう言っても過言ではないでしょう。

空想上の歴史小説やTVドラマによるイメージがあまりにも強いため、水戸黄門について語ることは、実は容易なことではありません。その一方で水戸徳川家の江戸屋敷の中で、藩主や、江戸詰めの勤番藩士達がどのようにして日々の営みを送っていたのかは、あまり詳しくはわかっていないのも実情です。

また、発掘調査という点、一般的には縄文時代や古墳時代などを思い浮かべる方が多く、江戸遺跡の発掘調査は、全国的にはあまり馴染みがないかもしれません。しかし、東京の都心部に所在している千代田・中央・港・新宿・文京・台東・墨田・江東の8区は、江戸の市中、すなわち都市域にあたることから、原始・古代よりも江戸時代に帰属する遺跡が確認される頻度が高いのです。

そしてまた、意識して記録された古文書などの資料に比べて、あまり意図されぬままに地中に残った遺跡の発掘成果によって復原される歴史は、古文書には残されなかった、その土地の記憶の一端を理解する手立てとなり、時には歴史を色鮮やかに物語ることもあるのです。

### 徳川御三家とは

徳川御三家とは、と問われたら、多くの人々はこう答えることでしょう。「御三家の筆頭は尾張、そして紀州（紀伊）と水戸でしょう」と。もちろん間違いではありません。しかし、なぜ尾張徳川家が六十五万石、紀州徳川家が五十五万石、そして両徳川家が大納言なのに、水戸徳川家だけは中納言で、しかも二十八万石（実質石高。表向きは三十五万石）と家格や石高に優劣があるのか、と問われたら、答えにつまるのではないのでしょうか。

実は、こうした格差が生じた理由については、はっきりとはわかっていません。そして水戸徳川家の二代藩主光圀自身が残したとされる発言に「徳川御三家とは、將軍家（徳川宗家）、尾張家、紀州家である」という類の言葉があることも、より一層問題を複雑にさせます。

こうした一種のねじれが「天下の副将軍」なる空想上の身分を生じさせる背景となったという説もあります。

いずれにしても、様々な研究が盛んに行われていると思われがちな江戸時代のことも、数多くの課題や謎を抱えているのです。

### 後楽園の歴史と文化

小石川後楽園は水戸徳川家がここ、小石川の地に屋敷を設けた寛永6年（1629）に造成が始まり、明暦3年（1657）に同地が上屋敷となった前後に、庭園としての整備が成さ

れたとされています。大正12年、「史蹟名勝天然記念物法」によって名勝に、同15年に史蹟として追加指定を受け、この法律を継承した「文化財保護法」によって昭和27年特別史蹟および特別名勝に指定され、現在、財団法人東京都公園協会によって管理・公開されています。

日本各地には、史蹟や名勝として指定・保護された文化財庭園が存在し、花や景色を求め、そして近年では、“癒し”や森林効果ブームによって、多くの人々が訪れます。小石川後楽園として公開されている現在の庭園は、江戸時代当時の後楽園の範囲からは縮小されており、かつて46箇所程あったとされる庭園内の見所も、現在は半数も残っていません。しかしながら都心に残された貴重な緑地として、そしてまた、水戸徳川家ゆかりの由緒ある文化財として、多くの方々に愛され、年間、数十万人もの人々が観光に訪れています。

小石川後楽園を訪れる目的は、一人一人違うことは言うまでもありませんが、多くの方は“円月橋”や“西湖の堤”など、庭園内の見所に加え、四季折々の花々や植物を鑑賞するために来園されることでしょう。



小石川後楽園 円月橋

しかしながら後楽園の魅力は、花や草木を愛でるだけでなく、様々な文化があったことを忘れることはできません。その一つが響応の舞台つまり、接客の装置としての性格です<sup>※1</sup>。一説には、江戸の市中だけで優に千箇所以上の庭園が存在したとされています<sup>※2</sup>。各庭園では、能や、詩歌管弦などにより客人をもてなす宴が催されていました。接待を受けるのは、將軍であったり、文人墨客であったり、様々な身分や階層の人々が訪れました。小石川後楽園にも、谷文晁をはじめとする多くの文化人が来訪したことが伝えられていますが、そうしたなかで、朝鮮通信使や琉球使節の来訪も注目されます。

一般に、江戸時代は鎖国政策の下で、オランダや中国などの限られた外国との外交関係しかなかったと考えられています。しかしながらこれらは交易を行なう目的、通商の関係にしかすぎません。一方江戸幕府は、前代の豊臣政権による朝鮮半島への武力侵攻によって途絶えていた李氏朝鮮王朝との国交関係の回復を政策とします。朝鮮通信使の通信とは、「信を通わす」という意味であり、江戸時代、原則として將軍が替わる度ごとに、その祝賀の意を表すために計12回、日本を訪れています。朝鮮通信使は釜山を発ち、



まず対馬に入り、博多から瀬戸内海の各地を經由して大阪、京都、名古屋へ、更に東海道を経て江戸に入り、浅草の本願寺などを宿舎とし、時には、日光の東照宮を参拝したことも伝えられています。朝鮮通信使の行列は、特に宿舎となった各地の人々に、大きな歓迎をもって迎えられました。

そうした歓待ぶりは、“唐人おどり”に代表される民俗芸能として、あるいは朝鮮通信使を模した人形などの民芸品として、様々な形で偲ぶことができます。

2002年のサッカー・ワールドカップの共同開催を契機として、韓日両国において様々な文化交流が行われ、日本では現在も熱狂的な韓流ブームが続いています。朝鮮通信使は、いわば江戸時代の韓流スターであり、文京区の歴史の1ページに小石川後楽園を舞台とした国際交流、文化交流があったことは、評価されるべきではないでしょうか。

後楽園の知られざる文化のもう一つは、動物にまつわるお話です。ある古文書によれば、筑波山で捕獲された全身が真っ白な毛の猿をはじめとして、後楽園の中には、珍獣奇獣を集めた“動物舎”、すなわち動物を飼育する小屋が設けられていたことが知られます。大名の屋敷（庭園）の中で、なぜ動物小屋が、と疑問に思われる方も多いことでしょう。しかしながら水戸徳川家に限らず、いくつかの大名家の当主は、今日でいう博物学に造詣が深く、動物を生態学的な見地から観察し、珍しい生き物などを飼育していた事例が見られます<sup>※1</sup>。

後楽園には、享保14年（1730）に象が招来されたことも伝えられており、後楽園付属の動物園の存在も、水戸徳川家の研究や小石川後楽園を鑑賞する上において、忘れることのできない貴重な文化のひとつなのです。

余談ながら、後楽園といえば岡山県に所在する旧池田家の庭園を思い浮かべる方が多いでしょう。実はこの庭園は、江戸時代当時は「後園」などと呼ばれていました。大正11年の文化財指定の際に、新規に「後楽園」として名称が登録され、翌年、旧水戸家の庭園が文化財指定される時に、混乱を避けるために「小石川後楽園」とされました。しかしながら、元々「後楽園」の名は東京・小石川こそが本家本元であったため、その矛盾に気づき、旧池田家の庭園を改めて「岡山後楽園」として名称を変更するに至った経緯があることも、どうぞお忘れなく。



泥絵 小石川水戸屋敷 館蔵

## 陸軍の兵器工場として

江戸幕府の瓦解によって多くの大名が国許の所領地に帰ることとなり、かつての江戸・東京は、大名家の広大な屋敷地が無人となり、武家地の処理問題が顕在化します。

明治政府は、こうした土地を接収し、新政府の用地として利用する施策をとりますが、江戸幕府の親藩中の親藩である水戸徳川家に対しては、明治維新の思想的な拠り所、即ち尊王攘夷の魁を成したことが評価され、土地の接収・召し上げではなく、購入という形で、いわば優遇措置をもって対応したものとされています<sup>※4</sup>。

こうして水戸徳川家の所有を離れた後楽園一帯の土地は、当初、兵部省の所管となり、程なくして陸軍が所有します。陸軍は、広大な敷地を兵器工場（砲兵工廠）として整備することを決めます。兵器工場としての土地利用を決定した背景には、江戸時代初期に整備された神田上水を工場用水として利用する意図があったためだと考えられています。陸軍では当初、敷地すべてを近代的な工場群として整備する予定でしたが、これに反対して、庭園すなわち後楽園を残すべきことを提言したのが、フランス陸軍から兵器技術教育の顧問として招聘されたジョルジュ・ルボン大尉であったとも言われています。

ルボンの力によって壊滅の危機を免れた後楽園も、兵器工場の煤煙などで植物の育成が阻まれ、一時期は荒廃したことがありました。警世家としても知られる荷風・永井壮吉は、その著作「日和下駄 一名東京散策記」の中で、「小石川なる水戸の館第も今日われわれの見る如く陸軍の所轄となり名高き庭苑も追々に踏み荒らされて行く」と記して、庭園の行く末を案じています。

とまれ、ルボンによる働きかけが陸軍の上層部に聞き入れられなかったとしたら、名園としての誉れが高い、今日の小石川後楽園が残されることはなかったわけであり、それは、文京区にとって大いなる損失だったということは確かです。

## 徳川御三家・江戸屋敷へようこそ

平成18年秋の特別展では、千代田区立四番町歴史民俗資料館と新宿区立新宿歴史博物館との共同企画による「徳川御三家江戸屋敷発掘物語（仮称）」を開催します。

文京区では、水戸徳川家の江戸屋敷の発掘成果を中心として、文京区のランド・マークとなっている文化財庭園、小石川後楽園の知られざる歴史や文化などについてご紹介いたします。

千代田区立四番町歴史民俗資料館では、紀州徳川家の屋敷跡の発掘成果を中心として、新宿区立新宿歴史博物館では、尾張徳川家屋敷跡の発掘成果を中心に、各館毎に、それぞれの徳川家に関する展示を行ないます。

徳川御三家の江戸屋敷発掘展へ、どうぞお越し下さい。

（加藤元信）

〈註〉

※1 白幡洋三郎 1994 「江戸の大名庭園 響応のための装置」INAX

※ 1997 「大名庭園 江戸の響応」講談社

※2 川添 登 1979 「東京の原風景」日本放送協会出版

※3 港区立港郷土資料館 2002 「江戸動物園鑑」ほか

※4 川崎房五郎 1965 「都市紀要13 明治初年の武家地処理問題」東京都



## 歴史文化資料としての 『南総里見八犬伝』

### 古文書講座の開催

当館では、平成17年9月10・17・24日の3日間、連続講座として曲亭馬琴作『南総里見八犬伝』を教材に古文書講座を行い、講師は文化財調査員の私がつとめました。今まで展示の付帯事業として古文書講座を開催した例（「小石川と本郷の米物語」・「本草から植物学へ」など）はありましたが、一つの事業として講座だけを独立させて開催したのははじめての試みでした。ふるさと歴史館を会場にしましたが少々手狭なため、受講者人数は30名と少なめに募集しました。結果的には予想以上に応募者が多く、105名を数えました。以下では、講座の主催者として、また講師をつとめて気が付いた点を挙げていきます。

### 読まれざる古典

古文書講座終了後のアンケート結果からは、「くずし字を読めるようになりたい」という応募動機のほかに、八犬伝そのものに関心を持たれた方が大勢いらっしゃったことがわかりました。今年も戌年ということもあって、正月にテレビドラマ化されるなど何かと話題になりましたが、講座募集時期には世間では特に取り沙汰されてはいなかったのです。『八犬伝』は、岩波文庫で全文が翻刻されていますが、文庫本だけでも全10冊という長さのため、実は「読まれざる古典」としても有名です。NHK人形劇「新・八犬伝」（1973～75年放映）や映画「里見八犬伝」（1983年劇場公開）として他のメディアで公開されていますが、ストーリーや人物設定という基本的事項でさえ、原作に忠実なものではなく、すべてアレンジしたものばかりです。書籍であって

も抄録が多く、原作の完全現代語訳や注釈付きの翻刻がないのも読まれぬ原因でしょう。かくいう私も、講座の教材として考える以前は、中公新書『八犬伝の世界』（高田衛著・初版1980年）を読み、漠然と「面白そう」というだけで、一行たりとも原作を読んでいなかったひとりです。ただ、読んでいなくとも知名度だけは高いものですから、いずれ読みたいと思っていました。講座の受講者の方々もこのような思いで応募した方が多かったようです。

### テキストとしてどうか

さて、講座講師として初めてテキストに向かい、様々な「発見」がありました。第一に、『八犬伝』はくずし字のテキストとして、あまり向いていないという点です。江戸時代の和本の種類には、大きく分けて、板本などで印刷された「板本」と手で書き写された「写本」の別があり、板本は比較的読みやすいものです。なかでもこの『八犬伝』は、漢字が多く、中国趣味の難解な熟語が何回も出てくるのですが、そこには二通りのふりがなが付してあって（残念ながら岩波文庫はふりがなを一つしか翻刻していません）、読者は中国古典の出典はわからなくてもおおよその意味は取れるようになっています。そして文字のくずし方はゆるく、くずし字のテキストとしては不適當であることを認めざるを得ませんでした。講座の準備をしていて内心「しまった」と思いましたが、2時間という講義のなかで文字のくずし方に重きを置くのではなく、その当時の歴史事情にまで踏み込もうという意志をもって講座に臨みました。表面的な文字のくずし方を問題にするのではなく、この有名な古典を、江戸時代後期の同時代史料として考えるというように方針を変更したのです。

### 地域史・文化史を知る素材として

講座では、第1回「猫俣（股）橋の由来」、第2回「湯島の大道芸人」と題し、文京地域を舞台にした場面をとりあげました。このほか、原作では南房総だけでなく、思った

以上に江戸市中とその近郊の地名が頻出します。特に、前半の主人公といってよい犬塚信乃の生まれ育った地は、武蔵国大塚であり、文京地域が重要な舞台となっています。第3回にとりあげた「穂北の植木窩」は、地域は現在の足立区保木間と考えられますが、ここに登場する園芸植物を収納するための建造物「植木窩」に注目しました。この植木窩は、植木屋が多く居住していたかつての文京の原風景としてとらえられる特徴です。

以上のとおり「古文書講座」の過程で「発見」した内容を含めて、平成18年度収蔵品展として「八犬伝で発見！—江戸庶民の生活文化—」を、4月29日（土）から6月4日（日）まで開催する予定です。

（平野 恵）



『南総里見八犬伝』湯島の大道芸人（実は犬坂毛野）が描かれた部分 館蔵



# 平成17年度のあゆみ

## 区民大学・文京の歴史講座

「先史時代の日本を科学する ー東京大学考古学研究室からの発信ー」(全3回)

- ◆6月4日(土)「どのようにして土器から歴史を読むのか？」  
／今村啓爾氏(東京大学教授) 参加者数……98人
- ◆6月11日(土)「人と植物関係史を読み解く」  
／辻誠一郎氏(東京大学教授) 参加者数……90人
- ◆6月18日(土)「日本列島の現代人の起源 ー捏造事件以後の旧石器時代研究の現状ー」  
／佐藤宏之氏(東京大学教授) 参加者数……84人



歴史講座

## 小・中学生のための歴史教室

- 「古代人のアクセサリー・勾玉とむかしのおもちゃ・泥めんこをつくってみよう」
- ◆第1回 8月3日(水) 参加者数……21人
  - ◆第2回 8月5日(金) 参加者数……24人



歴史教室

## 古文書講座

「江戸文芸を読むー南総里見八犬伝ー」

- ◆9月10日(土) 参加者数……31人
- ◆9月17日(土) 参加者数……24人
- ◆9月24日(土) 参加者数……22人  
／平野 恵(当館文化財調査員)



古文書講座

## 特別展

「近代建築の好奇心 武田五一の軌跡」

- ◆10月22日(土)～12月4日(日)(延べ38日間)  
入館者数(講演会・まちあるき参加者含む)……4,623人
- ◆記念講演会 11月12日(土) 会場:求道会館  
「武田五一とアール・ヌーヴォー」／足立裕司氏(神戸大学教授)  
参加者数……135人
- ◆まちあるき「武田五一ゆかりの文京を歩く」11月19日(土)  
／案内:武田五一展ワーキンググループ・メンバー
- コース(1) 五一若き日の学び舎、東京大学探訪 参加者数……44人
- コース(2) 五一ゆかりの地、本郷・西片を歩く 参加者数……49人
- ◆ギャラリートーク 11月5日(土)、20日(日)／当館学芸員  
関連事業「まちかどの近代建築写真展IN文京区」
- ◆11月2日(水)～12月16日(土) 会場:アートウォール・シビック  
共催:「まちかどの近代建築写真展」実行委員会



特別展

## 学習企画展

「文の京の写真展ーなつかしい昭和を訪ねてー」

- ◆2月11日(土)～3月19日(日)(延べ32日間) 入館者数……5,634人
- ◆展示解説 2月25日(土)、26日(日)、3月11日(土)、12日(日)  
／当館学芸員



学習企画展